論文要旨

葬式仏教のこれから

大宅宏季（経済学部 3 年）

指導教員：羽田功

地方から東京をはじめとする都市へと人口が流出することにより既存の檀家制度が崩壊する一方で、高齢化により葬式の重要性がますます高まっているという事実に着目し、このような状況で寺院として何が出来るかを模索する。

葬式仏教とは、葬式が現在では寺院の主な役目となっていて、仏教がかつてのような学問の最高機関ではなくなったことに由来する。第 1 章ではこの寺院が葬式を執り行う役割をいかに果たすようになったのかという経緯を、仏教が人びとに定着する歴史を踏まえて説明する。さらにそのうえで、葬式とはそもそもコミュニティにおいて、また残された遺族、死にゆく人にとってどのような役割を果たしていたのかを述べる。

現代仏教の抱える問題として、コミュニティの崩壊という問題がある。古くは寺院を中心としたコミュニティが、高度経済成長期以降の人口移動のために崩壊する。その結果、寺院の葬式の役割が薄れるとともに、葬式の在り方そのものも変化する。葬式の役割が変容したため、葬式の中心はこれまでの寺院から民間企業へと移りつつある。第 2 章では、このように民間企業中心の葬式へと移った経緯を、合理主義の考え方のい広まりとともに進んだ資本主義の発展と照らし合わせながら考察する。さらに、コミュニティの崩壊などの寺院の抱える諸問題についても扱い、現代の葬式の問題点を探る。

第 3 章では第 2 章までの流れを踏まえたうえで、寺院として現状のコミュニティの崩壊という社会問題にいかに向き合うことができるのか、なぜ寺院がその役割を果たすのにふさわしいのかを説明する。そのために、戦後、活発化したエンゲイジドブッディズムの活動や、「いのち」の大切さを扱う仏教など寺院だからこその強みを現役の住職の方との取材を踏まえたうえで考察を加える。またコミュニティの再興を図るのだとすれば、これまでの檀家を取り囲んで檀家以外の人々には閉鎖的であった寺院としてはその新たなコミュニティを築いていくために、どのようなことが必要なのかを考える。